
オイラとボクの救助隊日誌

みぞれ雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オイラとボクの救助隊日誌

【Nコード】

N5359L

【作者名】

みぞれ雪

【あらすじ】

絆の冒険記の番外編、その3です。セナとヴァイスが、2人で救助隊“キズナ”をやっていた頃の話を書きます。

始まりの夜に（前書き）

とうとうやってしまいました、こちらの作品投稿（笑）。

セナ視点、もしくはヴァイス視点で、救助隊活動の話を進めていきます。

今回はヴァイス視点で、しかし例により、初回は異常に短いですw

セナ

「本編“絆の冒険記”の、“第3話：ホノオの旅立ち”までを読んで下されば、話がわかりやすいかと（笑）」

ヴァイス

「とりあえず、前置きはこの辺で終わりにして、どうぞ！」

始まりの夜に

ひとりぼっちのボクの前に、ある日突然“キミ”は現れた。自分のことを人間だって言うから、びっくりしちゃったよ。

ちょっとドジでお間抜けで、寝起きは悪くて……。

でも、口は悪くても優しく、強くて……。とっても頼りにしています。

まだ救助隊の活動は始まったばかりで、これからどんなことが待っているかわからないや。

ワクワクしているけど、辛いこともあるのかと思うと少し怖いな。

でも、キミとなら大丈夫。独りじゃないって、こんなにも心強いんだね。

明日からも救助隊活動頑張ろうね、セナ。

セナとボク　　ヴァイスが救助隊“キズナ”を結成した夜、ボクは布団に寝転がり、夜空を見上げながらこんなことを考えていた。

やがてぐっすりと眠ると夜が明けて、ボクとセナの愉快的毎日が待っていたんだ。

始まりの夜に（後書き）

セナ

「これからどうやって話を進めるん？ 作者」

本編が今シリアスだから、とにかく明るく、ほのぼのとした雰囲気になればあと。

ホノオ番外と違い、ネタよりもストーリーの流れを重視するので、本編みたく“その1、その2方式”になりそうです。

「皮肉とイヤミが武器だぜ！」的なセナや、「セナをからかうのは楽しいな」的なヴァイス等、2人のいろんな面が書きたいです（笑）。

ヴァイス

「次話も書いていないのに言わないでよね？」

うーん、次はいつ投稿になるのやら……。とりあえず、本編の執筆に詰まったら番外編を書こうかと。

セナ&ヴァイス

「では、これから“オイラとボクの救助隊日誌”をよろしくお願ひしまーす！」

第1話：癒しの花を探して その1（前書き）

今回はセナ視点です。

やはりホノ才視点よりも書きやすいです（笑）

第1話：癒しの花を探して その1

月の光に照らされる穏やかな海を、ずっと、ずっと眺めていた。
今晩はもう、眠りたくなかったから。

何度目か分からぬ深いため息をつき、オイラは眠りを妨害した夢の内容を思い返した。

辺りは暗く、孤独を感じる空間に立っていたオイラを襲ったのは、酷い罪悪感。

オイラは生きていていいのかな？ 生きる価値あるのか？ 誰も答えをくれない。寂しい。怖い。苦しい……。

とても残酷で、そのうえ生々しい感情だった。夢だつて自覚はあったけど、それでも耐えきれず、気がついたらオイラは泣いていた。

結局、夢の中で誰かがオイラの名を呼び、暗い感情からオイラを救ってくれた。そして目覚めて今に至るのだが。

再び寝るのが、どうしようもなく怖い。

もう二度と、あんな気持ちを感じたくないのだ。あんな夢、もう見たくない。

時間というモノもなかなか意地が悪く、早く朝が来てほしいと願うオイラには、もどかしいほど長すぎる夜を手渡す。きつとオイラがああ夢を見なくて夜中起きずに済んだなら、もっと寝たくても夜は駆け足で過ぎてゆくんだろうな。

それでも、時間だつて立ち止まれるような暇人じゃあない。少し

ずつだが暗黒の空が明るくなり、星は太陽の光に隠されていった。

「おはよう、セナ！」

あくびをした後、目覚めたヴァイスが元気に挨拶する。
ようやく、朝が来た。

「おはよー！」

挨拶を返すオイラを、ヴァイスはまじまじと眺めた。

「今日は早いんだね」

そういえば、昨日ヴァイスは寝坊したオイラを起こすのに苦労したらしい。だからこそ言えるこのセリフなのだろうが　今日は、こっちにも事情があんのよ。

気がつくと、考えたくもなかったあの夢の内容を再び思い出していた。

「おーい、セナ？　どうしたのさ、ぼーっとして」

ヴァイスがそう言うと、オイラの顔をのぞき込んでくる。そこでハツとして、あの夢を思い出すのをやめにした。

「あ、悪い。まだ眠いんだもん……」

怖い夢のことを考えていたなんて、言えない。眠そうに目をこすり、とっさの演技。

「じゃ、ボクが叩いてあげる　きつと目が覚めるよ」

ヴァイスはそう言うなり、右手を振り上げる。　ヤバい、本気だ。

「さ、さあ　今日も頑張ろうか、ヴァイス君」

とっさに立ち上がってこう言うと、ヴァイスは満足げに返事をして手をおろした。

そして2人で“はるかぜ広場”に向かい、救助隊生活2日目が始まった。

「とりあえず、広場に困っていきそうなポケモンがいたら、ボク達が助けてあげよう！　いなかったら、“救助隊連盟本部”に行つて掲示板に貼つてある依頼を受けようね」

ヴァイスの提案に、オイラは頷く。

“救助隊連盟本部”というのは、救助隊のチームを結成する手続きをしたり、依頼を受けたり、こなした依頼を報告したり……。と、救助隊の活動のための施設だ。なんだか名前だけは立派だが、建物の形はペリカンみたいなポケモン、ペリッパーをモチーフにした間抜けなものだ。どうでもいい話だが、“本部”があるなら“支部”もあるのだろうか？

ポケモンになってから間もないので、オイラは分からないことだらけだ。ヴァイスにとっては居心地のよい“はるかぜ広場”も、オイラはまだ馴染めない。

ヴァイスを先頭にして広場を歩き、困っというそうな　オイラ達の力を必要としていそうなポケモンを探し始めた。

ちょうど、“カクレオン商店”の近くを通ったときだった。

「お願いします！　お金なら必ずなんとかしますから、私に“癒しの花”を売ってください！」

商店の経営者、カクレオン兄弟に必死にそう訴える声があった。見ると、黄色くて鮮やかな羽に、大きな目。そして、口先には花の蜜を吸うためのストローが丸まっている　チョウのようなポケモン、アゲハントが発言者のようだ。

「ごめんなさいね。あなたの事情はよく分かるし、“癒しの花”がウチに置いてあったらタダでもあげたいくらいなんだけど……残念ながら……」

兄の、緑色のカクレオンが残念そうにアゲハントに言う。

「どづしたの？」

声をかけたのはヴァイスだ。オイラとヴァイスも、その会話に加わることにした。

「私の子供が熱を出してしまって……。元々あまり丈夫な子ではないので、なるべく早く体調を回復させてあげたいのですが……」

弟の、紫色　色違いのカクレオンが、アゲハントの後を引き継いで説明を始めた。

「“癒しの花”は、悪化した体調を回復させるアイテムなんだ。つまりは薬草。でも、これがなかなか手に入らなくて……」

再びアゲハントが話し出す。

「あの子にもしものことがあつてはいけないから、すぐにでも“癒しの花”が必要なんです！　でも、“癒しの花”は、“岩石の山”というところにあつて……。あそこは岩タイプの、縄張り意識が強いポケモンが多いので、岩が苦手な私にはとても近寄りがたい場所なんです」

なるほど……。この世界のポケモン達は、広場のポケモンのように社交的なポケモン達もいれば、群で生きるポケモン達もいるのか。そういえば、オイラとヴァイスが出会った日も、縄張り意識の強いイシツブテ達と戦った。

「それに……」

ここで口を挟んできたのは、“カクレオン商店”の隣で道具を預かる施設“ガルーラおばさんの倉庫”を経営しているガルーラおばさんだ。

「“癒しの花”は、厳しい条件の元にはしか生えない花だって言うね。例えば、切り立った崖の岩の割れ目とか……」

「そんな……」

その言葉を聞くと、アゲハントは失望したように羽をたたみ、地面に降り立つ。

チラリとヴァイスを見てみると、しっかりと目があった。これは、やるしかないよな！

「オイラ達が“癒しの花”をとってくるよ！」

「ボク達、救助隊なんだ！ 困ってるポケモンを助けたいの」

「えっ……？」

オイラ達の言葉に、アゲハントは少し戸惑っている。……確かにオイラ達はまだ駆け出しだし、小さいから弱そうだけど。

「任せてよ！ オイラ水タイプだから、岩や地面タイプには強いんだ」

「ボクは炎タイプだから岩は苦手だし、ちょっと怖いけど……。でも、頑張りたい！」

「で、でも……」

アゲハントが心配そうな顔を見ると、助けくれたのはガルーラおばさん。

「大丈夫だよ。この子達は新人だけど、きっとやってくれるさ！」

根拠はなさそうな、だけど背中を押してくれるその言葉。

「じ、じゃあ、お願いしてもいいでしょうか？」

「もちろん！」

アゲハントの言葉に、オイラとヴァイスは声をそろえて返事した。急いだ方がいい依頼だ。

目的地“岩石の山”に向かうために、オイラ達がカクレオン商店に背を向けた、その時だった。

「待つんだ、キミ達」

そう声をかけるのは、2人のポケモン。今オイラ達の目の前にいるってことは、ずっと今の話を聞いていた……？

「今の話は聞いたよ。なかなか難易度の高い依頼のようだね」

2人のポケモンのうちの、1人のポケモン。水色の体で、額には赤い宝石がついている。黄色いくちばしや、手足についている水かきがアヒルらしいポケモン、ゴルダック。がそう言う。

なんだか、気取った喋り方だ。ナルシストっぽいというか、なんというか……。バラの花でも口にくわえさせれば、よく似合いそうだ。

「ええ。危険なところですが、この方達が行って下さると」

「ああ、なんてことだ！」

アゲハントがオイラ達“キズナ”を見ながら言った言葉を、ゴルダックじゃない方のポケモンが遮る。体の色はクリーム色で、スラ

りとした容姿の猫のようなポケモン、ペルシアンだ。こちらもまた、額に赤い宝石みたいなものがついている。

「キミ達！」

ペルシアンの視線の先にはオイラとヴァイス。

「どうやらキミ達はまだ新人だそうじゃないか！？　こんな依頼、キミ達にはまだ早すぎる！」

こちらもちちらで、喋り方に癖がありすぎる。一言一言に入る力がオーバーすぎるといつか……。日常会話向きの話し方じゃないよ。舞台にでも出てるよ　　と思いたくなるようなカンジ。

「そんなのやってみなきゃ分からないだろ！？」

こんな2人組なんかとまともに話すのも気が引けるが、言っている内容がムカつくから言い返した。

「あーら、キミ。先輩の救助隊に向かってその言葉遣いはないんじゃないかい？　もつとこの僕を見習って上品に美しく　　」

「あら失礼。お上品でお美しいゴルダック様」

イヤミたっぷりな皮肉をぶつける。　　でも、たいていこの手のナルシストは、悪口を悪口と思わないから困るんだよな。

「分かればよろしい。」

ほら、やっぱり。

オイラのイヤミなんか気にもとめず、今度はペルシアンが話し始

めた。

「と・に・か・く！　ここはこの、スーパーランクの救助隊“エレガンツ”にお・ま・か・せ」

“エレガンツ”。その素晴らしいネーミングセンスには脱帽つす。もちろん皮肉だが。

一応スーパーランクだから、ノーマルランクの“キズナ”よりも1つ格上なのだが……。

「本当に、行ってくださるんですか？」

アゲハントのその言葉にギョツとして、オイラとヴァイスはとっさにそちらを見る。マジで、こんな奴らに頼むのか？

「もちろんさつ。困っているポケモンは放っておけないからねっ」

ゴルダック本人は、爽やかにカツコ良く言ってるつもりなのかな。それとも、オイラのひねくれた心を通すから気持ち悪く見えるのだろうか？

「じゃっ、僕らは行くよ！　ゼニガメ君にヒトカゲ君、キミ達は心配要らないさ。安心して別の依頼を受けてくれたまえ！」

ペルシアンがそう言い残すと、“エレガンツ”の2人は“岩石の山”方面へと駆けていってしまった。

「ちくしょー、アイツら！　良いとこ持って行きやがった！」

思わずその声を漏らしてしまった。オイラ達が頼まれた依頼なのに、アイツらに取られるのは悔しい。

「……でも」

しばらく黙っていたヴァイスが口を開く。

「確かにあつちはスーパーランク。ボク達は昨日活動したばかりの駆け出しだし、あつちの方が信頼されるのは当たり前だよ」

ヴァイスは弱気な発言をする。

「あ、えーと、ごめんなさい……。私、焦っていてついあの方達に頼んじゃって」

アゲハントが気を使って申しわけなさそうに言うてくる。まあ奴らにお願いしたくなる気持ちも分からなくもないけど。

「うん……」

返事はするものの、ヴァイスは残念そうにしている。なんだか少し、見ていられなくなる。

「なあ、ヴァイス」

返事をせずに、ヴァイスはオイラと目を合わせた。

「オイラ達も、今すぐ“岩石の山”に行くぞ！」

「えっ？ どうして？」

ヴァイスは聞き返してきたが、オイラの提案に少し目を輝かせている。

「だって、もしもアイツらが依頼に失敗したらどーすんのよ？
“癒しの花” 手に入らないじゃん」

「あ……確かに！」

「それに、“エレガンツ”の奴らが依頼を頼まれたからといって、依頼主はオイラ達が要らないとは言ってないもん。な、アゲハントさん？」

アゲハントに話を振ると、頷きながら答えた。

「あ、はい。本当に行ってくださいるのでしたら、お願いしたいのですが……」

「さっきも言っただろ？ 全然構わないさ！」

アゲハントに元気に答えると、ヴァイスはクスリと笑った。

「そっか。そうだよな！ ボク達も行こう！」

「ああ！」

こうして、今度こそオイラ達は“癒しの花”を取るために“岩石の山”の方へと駆け出した。

ガルーラおばさんやカクレオン兄弟の激励の声が背中を押してくれた。

絶対に、
“癒しの花”を手に入れるんだ！
強く強く、
そう決意
した。

第1話：癒しの花を探して その1（後書き）

先日、自分の小説すべてを、ユーザー登録をなさっていない方からの感想も受け付けられるように設定しました。

お時間がある方は、いつでもお気軽に感想をくださるととても嬉しいです！

後に、上記の内容を本編“絆の冒険記”のあとがきにも書かせていただきます（そちらの方が、この番外編よりも圧倒的に読者様が多いので）。どちらも読んで下さった読者様には少々くどいように感じられてしまうかもしれませんが、ご了承ください。

第1話：癒しの花を探して　その2（前書き）

この“癒しの花編”は今回で終わりにしようかと思って執筆しましたが……（汗）。
いろいろと遊びすぎてしまいました（笑）。

セナ

「久々の更新。楽しんでいただけたら幸いです」

ヴァイス

「では、どつぞー！」

第1話：癒しの花を探して その2

“はるかぜ広場”から少し南東に進むと、目的地の“岩石の山”があった。

「よし、探すぞ」

オイラの言葉にヴァイスは返事。そして、“癒しの花”を探すために“岩石の山”に入ってしまった。

ガルーラおばちゃんが「厳しい条件に生えている」と言ったから、岩の裂け目なんか注目しながら歩く。

この“岩石の山”は、全体的な起伏こそなだらかで急な崖はないが、表面はすべて岩石できていて、とてもゴツゴツしている。

大きな岩があると段差が激しくて、小さなオイラ達じゃ、よじ登らなくてはならない。

「よいしょっと」

目の前の大きな岩に手をかけて、オイラはまた段差を越えようとする。

オイラの後ろにはヴァイス。

もう少しで岩を登りきりそうになったその時。

足を突起に引っ掛けたつもりで手を離すと、足は空振り。

「うわー！」

落ちる！ そう直感的に判断すると、オイラは目をつむった。命が危ういほどの高さじゃないが、背中を強く打つんだろぅな。

しかし、いつまで経っても痛くない。体が浮いているようだ。

「あれ？ オイラ浮いてる!？」

そう言いながら体を動かすと、フツと地面に落ちた　　ヴァイスを下敷きにして。

「うわ、ヴァイス大丈夫か!？」

すぐにつつぶせのヴァイスから降り、話しかけた。

「もう、セナの登り方危なっかしいよ……」

不満げなその言葉で、オイラは悟る。

「あり？　もしかして、お前がオイラを支えてくれたのか？」

「そうだよ。せつかくボクが支えたのに、セナが動くからさあ……」

「あらら、悪い悪い。支えてくれてサンキュー、ヴァイス！　助かったぜ　あははは……」

苦笑いしながらオイラが言うと、ヴァイスは呆れたようにため息をつき、オイラに再び登るように促した。

もう落ちないようにしよう。そう思い、慎重に足をかけた。

そうこつしながら坂を上ると、とうとう山頂まで来たようだ。

山頂。坂ではないとは言え、相変わらずゴツゴツの地面。歩き方を間違えると足をくじいてしまいそうだ。

「厳しい条件下で、“癒しの花”は生える……か」

「どこにあるんだろうね？」

オイラとヴァイスがそう言葉を交わしたその時だった。

「うわああー！」

どこかで聞いたことのあるような声の、悲鳴が上がったのだ。

前方に目を凝らすと、激しい動きのポケモンが目に入る。どうやら何かもめているようだ。

「行くぞ！」

オイラが言うと、2人で走り出した。

少し近づくと、状況が飲み込めた。

地面に倒れているクリーム色のポケモン。そして独りで戦う水色のポケモン。

あれはペルシアンとゴルダック。オイラ達への依頼を取っていつ

た救助隊、“エレガンツ”だ。

もう少し近づくと、ヴァイスが言葉を発する。

「エレガンツ”が襲われているあのポケモン、“オコリザル”って言うポケモンだよ」

争いの現場のすぐ近くにきたオイラ達は、大きめの岩に身を潜めて様子を伺っている。

たわしのようにモサモサと生えたクリーム色の体毛の丸いからだに、豚のような耳と鼻がついている。そして手足は器用に動き、どこなく猿っぽい感じだ。

オイラはそんなポケモン、オコリザルを見ながら、

「岩タイプなのか、あれ？」

「ううん。格闘タイプのポケモン」

ヴァイスはそう返す。

岩タイプのポケモンが多いこの山だが、全てのポケモンが岩タイプというわけではないようだ。

「ペルシアンさんはノーマルタイプのポケモンだから、格闘タイプの技は苦手なんだ。だからゴルダックさんが独りで……」

ヴァイスが言いかけると、オコリザルの拳がゴルダックに襲いかかるうとした。

フラフラのゴルダックはなんとか攻撃をかわす。が、地面の岩の凸凹のせいで足首をひねり、崩れるように倒れ込んだ。

「……ぷっ！」

広場での気取った姿とはかけ離れたその出来事。オイラはあまりのカッコ悪さについ吹き出してしまった。

「なに笑ってるのさせナ！ あれってすごいピンチだよ！」

ヴァイスの正論。

「あ、悪い悪い。どうもコメディに近いピンチだからさ」

笑いながら答えるオイラ。もちろんヴァイスは不満げな表情。そしてこんな一言を。

「さっき岩から落ちたセナが言えないよ」

それを言われてはおしまいだ。しかし意地になり、無理やり言葉をつないだ。

「えっへへ　オイラは可愛いドジっ子だからさあ」

「あっ！ー！」

ヴァイスに言葉を遮られた。どうやら戦闘状況がヤバいらしい。

オコリザルの方を見てみると、確かに、ヤバい。動けないゴルダックにとどめを刺すために、腕を振り上げている。

冗談はここまで。戦闘開始だ！

「どろじよう、どろじよう……」

ヴァイスは岩の陰から何度もそう呟くが、“どろじよう”の後の一歩が踏み出せないようだ。

「よし、オイラ行ってくる!」

急いで岩陰から飛び出し、オイラはオコリザルとの戦闘に参加しに向かった。

「おーい、お前たち!」

とりあえず、オコリザルの攻撃動作を解除しなくては。声をかけてみると、作戦通り。オコリザルは手をおろしてこちらを向いた。

「あ、君は、さっきのゼニガメ君……」

ゴルダックのその声から判断すると、なかなかダメージが多いようだ。

「どーしちゃったの？ 危ない戦いなんかして〜」

その場の雰囲気緩和を試みて、陽気に話しかけた。

「なんだ、チビのガキじゃねえか。こんなんじゃ面白くねえ」

いきなりチビ呼ばわりされるなんて……。 “チビ” って言われると、なんだか無性に腹が立つ。

「ち、チビで何が悪いかよ……？」

今すぐ殴りたかった。でも危なそうだから、必死に怒りを抑えていた。

「俺様はこの“岩石の山”で一番強いポケモンなんだ。だから、誰と喧嘩してもちっとも面白くねえ。

それで、外部から来たポケモンで、俺様と互角に戦える奴を探している。

そこでさつき、こいつらに出会って……」

“エレガンツ”の2人を見ながらオコリザルは言う。

「こいつらに事情を話したら自信満々に首を縦に振ったんだ。しかし結局ザコだ。この山のポケモンよりも弱い」

あちゃー。それは身の程知らずの“エレガンツ”のおっちゃん達が悪いわ。ゴルダックはザコと言われて悔しそうだが……うん。認めた方が身の為……なのかな？

「お前のようなチビ、もっと相手にならないだろうがな」

な……。オイラはこの“エレガンツ”の奴らよりも下なのか！？
だいたいさつきからチビチビチビチビって……！

気がつけば、オイラはとんでもない暴言を吐いていた。

「うるせーよ、このブタザル！ チビだからって甘く見てると泣かすぞー！」

「ちょっと、セナ！」

隠れていたヴァイスだが、危なっかしい発言を止めようと、つい出てきてしまった。

「あ……………」

戦う心の準備ができていないのに、状況に乱入してしまった。そんなヴァイスは、頭が真っ白になったように立ち尽くした。

まあ、どうやらオコリザルの眼中には生意気なオイラしかいないみたいだが。

「てめえ、俺様にブタザルとはいいい度胸じゃねえか、このクソガキ！」

本気で怒らせてしまった。しかも“泣かすぞ”とか……………不可能な脅しを。

どうしよう、マズい。泣きそうなのはオイラだ。

「あ、はは。ごめん遊ばせ。ワタクシってばついつい口が滑って……………」

情けない言い訳だけど、仕方ない。

だって……………絶対勝てないもん！

「ガキだからって容赦はしないぜ……………」

オコリザルは指をバキバキ鳴らす。そして右手を振り上げた。

「ちょっと、待って！ オイラ本当は女の子なんです！ か弱いか弱

「女の子……」

「食らえや！」

オイラの言葉を遮り、オコリザルの右手が振り下ろされる。

「キヤーツ！」

“女の子”などと言いついたせいでだろうか。女々しい叫び声になつてしまつた。

右に飛んで攻撃を避けると、オコリザルの拳が地面を叩き割つた。

「わあっ！」

全くの攻撃の範囲外にいたヴァイスですら、その大きい音に驚き、声を上げた。ついでに一応言っておくと、ゴルダックも無事。

「逃げられると思うなよ……チビ」

もう、チビつて言葉に構っている余裕はない。

とりあえず目の前の攻撃をかわしたオイラだけど、もちろんまだ体勢は整えていない。今、攻撃されたら。

オコリザルはそんなオイラに近づき、容赦なく右手を振り上げた。

第1話：癒しの花を探して その2（後書き）

セナ

「おい……この展開って……（汗）」

ヴァイス

「セナってホノオほど短気じゃないんだけど、“チビ”って言われると怒るよね（笑）」

以前プラネット先生との番外編でも、こういうシーンを取り入れました（笑）。

ホノオ

「何気にヴァイスの言葉が痛い……（泣）」

シアン

「事実じゃん」

第1話：癒しの花を探して その3（前書き）

久々の更新です！

現在冒険記の本編が非常にシリアスですので、こちらで楽しんで
いってください！ と言える出来じゃない気がします；

セナ

「久々の更新にそれかい（汗）」

そもそも、オコリザル出したのが間違いだったなあと（汗）。予
定では、岩タイプのポケモン達に絡まれるはずが……。

ヴァイス

「あらら……（汗）」

ホノオ

「まあとりあえず、アホセナとヴァイスの活躍をご覧下さいませ」

シアン

「下さいませ」

セナ

「ホノオにアホとか言われたし……」

第1話：癒しの花を探して その3

オコリザルの右手がオイラに迫る。体勢が崩れたオイラには避ける術はなく……。オイラは地面に叩きつけられるように、甲羅を殴りつけられた。

「ぐっ……!!」

甲羅から衝撃が伝わり、腹が痛い。さらに、殴られた勢いでオイラの体は地面の岩に激突。頭を強く打った。

「セナ！ 大丈夫!？」

「う……なんとか」

ヴァイスの声に、体を起こしながら応じる。ヴァイスはこちらが心配だが一歩が踏み出せないように、足を動かさずに前のめりの体制になっていた。

「うらぁ、くたばれチビ!」

オコリザルが怒鳴り散らす声が、後ろから聞こえた。マズい！そう思った次の瞬間には、乱暴に尻尾を掴まれた。尻尾が握りつぶされそうだ。痛い。

そしてオイラの体は宙を舞い、振り回され……地面に頭を叩きつけられた。

「ぐあっ!!」

思わず鋭い悲鳴を上げてしまったが、仕方がない。地面の岩がガラガラと割れるほどの勢いだったし、割れて尖った破片が頭に傷を付けた。

さつきゴルダックを笑ったことを後悔した。これは、コイツが異常に強いんだよ……。

「くっ……!!」

腕に力を込めて体を起こし、なんとか立ち上がった。……でも、頭を打ったせいだろうか。めまいが酷い。ぐるりぐるりと青空や雲が回っている……。

とりあえず、クリーム色の巨大タワシを見つけた。それは つまりはオコリザルに、オイラは攻撃を繰り返す。

「“水鉄砲”！」

あれ？ 強い水の流れは、オコリザルに当たっていない。焦点が定まっていないのだから、当たり前か。

攻撃を逃れたオコリザルは、今度はオイラの左側から迫ってくる。今度は背中を蹴られ、地面に体が引きずられる。両腕にすり傷。

「セナ！ あわわ、どうしようどうしよう……!!」

慌てるヴァイスの声が聞こえる。相変わらず、“どうしよう”の後の一歩が出ないようだ。

オコリザルは、立ち上がるのに苦勞するオイラに無情に近寄り、

背中の上に乗ると、何度もジャンプした。

「後悔しろよチビ。誰がブタザルだ？ あ？ 謝ったって許さねえかな！」

「うっ……」

着地の瞬間は耐え難い。お腹が圧迫され、思わずうめき声が漏れる。

この体格差に、一方的な攻撃。もはやこれ、イジメじゃない？

だんだんと気が遠くなった。チビとか言われたことに対する、怒りもなくなった。

もう、どうにでもなれ……。

目を閉じた、その時。

「や、やめなよ……」

控えめな声が聞こえた。この声は。

「あ？」

オコリザルが聞き返すと、声の主は今度は大きな声で、

「やめなよ！ セナがかわいそう！」

叫んだのは、ヴァイスだった。

「っんだよ。ムカつく奴を殴って何が悪いんだよ」

と、オコリザル。……普通に悪いんですけど。

「あ、あうっ……でも、でもっ……」

あらら。せつかく途中までは格好良かったのにな。萎縮したヴァイスはもごもごと言葉を濁す。

「てめえも痛い目に遭いたいようだな？ なあ？」

「ひゃっ！ 嫌だよ！ ごめんなさいっ！」

すっかり臆病な発言のヴァイスに、オイラは苦笑いでため息でも、少し元気が出た。

オコリザルはオイラから下り、ヴァイスの元へ。よし、チャンス。

「うわわ、来ないでよー！」

ヴァイスが逃げようと駆け出すと、

「待てやゴラァー！！」

オコリザルも追いかかけようと駆け出す。つまり、オイラに背中を向けた。

オイラは力を振り絞り、立ちあがる。そして見ると、オコリザルは意外と足が速い。もうすぐヴァイスに蹴り1つ入れられそうだった。

今だ。

「水鉄砲」！」

今度は視界も良好。オイラの体力がピンチなのも幸いして、強力な“水鉄砲”がオコリザルを捕らえた。

「ぎゃっ！」

「あっ、セナ！」

オコリザルの足が止まると、ヴァイスは心底ホツとした様子でこちらに駆け寄ってきた。安堵のせいか、ヴァイスは涙目。

「大丈夫だった？ セナ」

「はあ、はあ……。ま、まあ、余裕？ みたいな……。はあ」

さすがに呼吸が整わず、オイラの返答は頼りない。でも、大丈夫。突破口を見つけたんだ。

「ぶっ殺すぞクソガキ！」

目を血走らせ、暴言をはきながらオコリザルが駆け寄ってくる。ヴァイスが小さく「ひっ」と悲鳴を漏らした。

「よしヴァイス。遠距離作戦だ！」

オイラはこう言うと、再びオコリザルに“水鉄砲”を。

すると、狙い通り。やっぱりアイツには遠距離技が不利らしく、抵抗なく水に打たれる。冷静さに欠けるため、攻撃を避けずに水にダイブ！ 滑稽、滑稽。

「げぼっ……！」

水が口から入ったらしく、むせてる。水を熱湯に変えるべく、オイラはヴァイスに目配せした。

「あっ、う、うん！ “火の粉”！」

すぐに理解したヴァイスは、オコリザルに火の玉を飛ばした。

「あぎゃっ……熱っ、げぼっほっ！」

オコリザルは熱さに飛び上がった。ここまで自分達が有利になると、最初に負けていたのもバカバカしくなってきた。

とりあえず、攻撃をやめてみる。

「はあ、はあ……このガキイイ！」

うわ、すごい執念。オコリザルは狂ったように怒鳴り、ふらつく足取りでこちらに駆け寄ろうとしてきた。

「きゃー、怖いおじさんが来るー」

棒読みで言うと、オイラはまた“水鉄砲”でオコリザルを攻撃した。

うん。正当防衛だ。先に攻撃の意志を見せたのはあっち。

とりあえず、またヴァイスに目配せしてみたが、ヴァイスは苦笑いして首を振った。まあいいか。

10秒足らずで攻撃をやめ、再びオコリザルの観察。

「はあっはあっ……こんにやるー！ ぶん殴る！」

オコリザルは懲りずに立ち上がり、右手を振り上げて近寄ってくる。怒りが増したからか、さっきよりも早かったような……。

「きゃー、殴られるー」

再び棒読み。そして8割の力で“水鉄砲”を放つ。

そしてまた……。

これを、もう3回くらい繰り返した。

そしてついに。オコリザルはうつ伏せに倒れて、起きあがらなくなった。……さすがにやりすぎたかな？

「なんか……オコリザルさんがかわいそうだな」

ヴァイスのその言葉が、ちょっと痛かった。

痛む体を動かして、オイラは恐る恐るオコリザルに近づいてみる。頭が痛い。腕も、膝も痛い。……やっぱり正当防衛ではないか？ 再びこう思ったが、とりあえず謝ろうかな。

「おい、大丈夫か？」

少し距離を置いて、オコリザルに話しかけると……

「こんな負け、認めねえ。卑怯なんだよ、遠距離攻撃なんて」

顔を伏せたまま、オコリザルが悔しそうに言う。

そう言えばコイツ、元々は“張り合いのある”バトル相手を探していたんだっけ？ 確かにこの“岩石の山”には、岩タイプのポケモンばかりだから、相性の良い格闘タイプのオコリザルには敵なし（最も、他のオコリザルよりも強かったらの話だが）。だからかな、オイラみたいな遠距離攻撃が使える相手には慣れてないから、逆に勝負にならないんだ。

あれ？ じゃあ“エレガンツ”のゴルダックはどうなんだろう？

「うん……悪かった。けどさ」

オイラもやりすぎたけど、言わなきゃ気が済まないこともある。

「あんまり戦い慣れてないオイラが言うのもだけど、もうちょっと世界を知った方がいいよ？ おっちゃん。自分が強いって、勘違いしてるもん」

「……ぐすん」

ぐすん？

「もうやだ、俺。こんなクソガキに負けて説教されて……。お、俺……」

実に情けない声だ。

言葉を区切ると、オコリザルは跳ねるように立ち上がった。仕返しをする気か？ 警戒して、オイラは身構えるが……

「うわああーっ！ 覚えてるよチビガキー！」

こう叫ぶと、オコリザルは泣きながら走り去ってしまった。メンタル面が、非常にもらいらしく、本当に泣かせてしまった。覚えてると言われなくとも、アナタのことはずっと忘れませんとも。

「…………ふう」

難が去った。安心感から、オイラは地面に座り込む。

「何だったんだろうね……。けっこう泣き虫さんだったみたい」

ヴァイスはオイラに近寄ると、あきれ気味に呟く。

「威張り散らしてる奴って、案外もろいモンなの。例えば、ブレロとブルルだってそう」

昨日の依頼で邪魔をしてきた、2人のポケモンを思い出す。ヴァイスをからかっていたらしいそいつらと、今のオコリザル。なんとなく、似ている気がした。

少しの間、戦いで傷ついた体を休めるためにただただ座っている
と のんびりとした気分をぶち壊す声があった。

「ああっ！？ これはー！」

このうるさい声は、“エレガンツ”のペルシアンだ。何かを見つけたようだ。オイラとヴァイスがそちらを見ると、

「これこそ、“癒しの花”！」

地面を見ながら、今度はゴルダックが言う。

「うそ!？」

オイラとヴァイスは声をそろえ、そちらへ駆け寄る。と言っても、オイラはフラフラ、ヨロヨロと、ゆっくり歩いたのだが。

岩の割れ目　これは、さっきオイラが尻尾を掴まれて頭を地面に叩きつけられた時にできた　から、小さな桃色の花が顔を出していた。

岩の間で育ったはずなのに、オイラの頭で衝撃を受けたはずなのにまっすぐに生えるその花。さすが、特殊な力を持っているだけあるな。

「美しい花だ。優雅でしなやかな花びらに、自己主張の強すぎない、程よい品のあるピンク色。ああ、丸みを帯びた形の葉も美しい！」

気持ちの悪いセリフをほざきながら、ゴルダックは花を摘む。

花を、摘まれた！

これで、“癒しの花”は“エレガント”のもの。オイラ達“キズナ”は、依頼に失敗したんだ。

大体、人が戦ってやったのに、その爪痕からちゃっかり花をゲット……。

ものすごく、イライラした。こんな奴らに負けたのは、悔しくて。今のオイラは、もしかしたらオコリザルと同じ気持ちなのかもな。

「依頼成功おめでとうございます、 “エレガンツ”さん。やっぱり先輩の救助隊は、漁夫の利がお得意ですね……」

「セナ……?」

“エレガンツ”の奴らに背を向け、精一杯の嫌みをぶつけた。否、負け惜しみなのだろうか?

オイラの言葉を聞いて、ヴァイスは不安げな声を漏らした。

「行くぞ、ヴァイス」

オイラが足を無理やり動かして、憎たらしいその場を離れようとする……

「まったく、素直じゃないんだから、キミは」

と、ゴルダックが声をかけてきた。

振り返り、オイラがゴルダックを睨みつけると…… “癒しの花”を、ゴルダックが差し出してきた。

「何のつもりだ?」

攻撃心むき出しのオイラ。

「僕達からのプレゼントさっ。キミの頑張りと勝利への祝福さ」

ペルシアンがそう言うと、さらにゴルダックは、

「この依頼がうまく行ったのは、キミのお陰さ。これは、キミ達の手柄さ」

こうして、オイラは“癒しの花”を手にする。しなやかで弾性のある茎が、オイラの右手の中で元氣よく揺れた。

結局その後、“エレガンツ”がくれた“オレンの実”で傷をいやし、オイラ達は4人で広場に戻った。

依頼主のアゲハントは、本当に嬉しそうだったし、カクレオンさんやガルーラおばさん、そして“エレガンツ”の2人も、オイラ達を称えてくれた……。

こうして、依頼成功を“救助隊連盟本部”に伝えると、オイラとヴァイスは“サメハダ岩”に帰ったのだった。

「なんか、意外と悪い奴じゃなかったな」

サメハダ岩にて。夕飯のリンゴを食べながら、オイラが言った。

「“エレガンツ”の2人のこと？」

「ああ。初めはすごく嫌だったけどさ。手柄譲ってくれたし、“オレンの実”くれたし」

少し考えた後、ヴァイスは言う。

「それは当たり前だよ。だって、“エレガンツ”も救助隊なんだか

ら。誰かのためになる活動が大好きなんだ」

「……ふーん」

まあ、確かに。こういう仕事をしようとするには、それなりの人格は必要だな。

……オイラは、この仕事にふさわしいのかな？

「救助隊のポケモンは、みーんないいポケモンばかりなんだよ！
ボクらも、そういう救助隊になろうね！」

ヴァイスが笑顔で言う。オイラ達ならなれる気がした。

「ああ！……でも、救助隊には勇気も必要じゃないか？ お前は
もーちよい勇気を持たなきゃ。な？」

少し意地悪に、オイラは言ってみた。今回、ヴァイスはほとんど
戦っていなかったからな。

「あ、うん。ゴメンね」

明るかったのが一転し、ヴァイスはしゅんと落ち込む。

「まあ、いいさ。今日はお前がオコリザルの気をそらしてくれたお
陰で勝てたし、昨日のブレロ達との戦いや、一昨日のイシツブテと
の戦いではそれなりに頑張ってたしな」

「えへへ、ありがとう。昨日や一昨日は、なぜか勇気がでたんだ」

ヴァイスは照れくさそうに言った後、さらに、

「いつも勇気が出るわけじゃないのが、ちょっと悔しいかな？でも、セナに合うまでは勇気なんて出なかったから……。セナのお陰だよ！」

「えっ！」

こうストレートに言われると、すごく恥ずかしい。顔が赤くなるのを感じた。

「えへへー セナ、照れてるー」

「うっ、うるさいうるさい！」

昨日オイラが照れ屋なのがバレてから、ヴァイスに弱みを握られているような……。顔がさらに赤くなる。

「とっ、とにかく！ 明日からの救助では、もっと頑張ること！いいな!？」

恥ずかしさを紛らわすための一言に、

「はぁーいー！」

ヴァイスは楽しげな返事。

じつじて、1日が過ぎていった。

第1話：癒しの花を探して その3（後書き）

普段の3割くらいの労力で、ザザーっと適当に執筆したこの番外編。うーん、ぐだぐだでしたね（笑）。

セナ

「をいこら作者（怒）」

まあ、グダグダ“癒しの花”編が終わったので、これでようやく、この番外編にて書きたかった話も書けます（笑）。

ヴァイス

「今度は作者さんを頑張らせるから、これからもよろしくね！」

そう言えば……。 “ヴァイス弱虫設定” って、あんまり本編で活かされていない気がします；

セナ

「まあ、本編じゃ、ヴァイスがたまたま勇気を出せた話を取り扱ってるし、この番外編の話は飛ばされてるし……」

ですから、弱虫なうーたん（w）を書くのが少し楽しみです（笑）
えーん怖いよセナー……的な（）

シアン

「カッコいいヴァイスもいいけど、弱虫なヴァイスもみたいナ」

ヴァイス

「なんか恥ずかしいなあ（汗）」

ホノオ

「とりあえず、次回もお楽しみに」

セナ

「なんでそのセリフお前が言っん？」

ホノオ

「やっぱりオレのセリフがないと、オレのファンの方が悲しむと思
っ（以下略w

第2話：よい子の冒険隊

その1（前書き）

セナ

「あれ？ また更新かい？」

- ・番外編だから低クオリティー
- ・ぶっちゃけこの後の展開は考えていない
- ・なんかキャラのやり取りがすんなり思いついた

以上の理由から、なぜか更新できてしまいました（笑）。

ヴァイス

「今回はボクの視点だよ」

では、どうぞ！

第2話：よい子の冒険隊

その1

“癒しの花”の依頼を成功させた次の日の朝。

ボクが目を覚ますと、セナがもう起きていてびっくり。この前はたまたま寝坊しちゃっただけで、本当は早起きさんなのかな？

それにしても、眠そうにボーっとしながら海をみているけど。ボクが目を開けたのにも気がついていないみたい。

「セーナっ、おはよ！」

「うわぁ！」

ボクが勢いよく飛び起きて声をかけると、セナはかなりびっくりしたみたい。声を上げて、後ろにひっくり返っちゃった。

「あはは、ビックリしすぎだよ」

「おっ、お前がいきなり」

起きあがろうとしながらしゃべるセナだけど、途中で言葉を区切った。

「ほっ！ よいしょ！ あ、あれ？ 起き上がれない！」

と言って、セナはじたばたした。ゼニガメになって、甲羅がある体にまだ慣れていないんだろっな。

横にコロンと転がればうつ伏せになれるんだけど、セナは必死に仰向けの状態から足をついて立ち上がるうとしている。なんだか可

愛いから、もう少しこのままにしておこうかな？

「はっ！ とりゃっ！ よいしょーっ！」

「あぁっ、惜しい！」

……10分くらい経ったかな？ 結局セナは疲れ果てた末に、ようやく横にコロンと転がる方法で立ち上がった。

あぁ、朝から面白かった！

こうしてこの日も、救助隊“キズナ”の活動が始まった。まずは広場に行って、困っているポケモンがいたら助ける。いなかったら“救助隊連盟本部”に行つて、掲示板に貼つてある依頼を受ける。……昨日と同じ手順だね。

まずは朝ご飯のリンゴを食べて、“はるかぜ広場”に向かう。ポケ達が集まってくる。中央の噴水の近くを歩いていると……。

「うーたん！」

と、可愛い声がボクを呼んだ。そして、こっちに3人の小さなポケモンが駆けてきた。

「ウパ丸くん、スーくん、チュールちゃん！ おはよう！」

ウパーの“ウパ丸”くん。スポミーの“スー”くん。そしてムチ

ユールの“チユール”ちゃん。……この3人は、いつも広場で遊んでいる仲良しさんで、3人のお母さんも仲良し。セナに会う前から、ボクはよくこの3人と遊んでいた。

「おはよー、うーたん！」

「うーたんげんき？」

「うん。ありがとう」

ボクはちつちな3人と同じ目線になるようにかがんで、お話をした。みんなすごくいい子。

「う、うーたん……？」

と、セナが怪訝そうに言ったのを聞いて、ボクはハツとした。その呼び方、けっこう恥ずかしいんだけどな。

ここで、セナが言葉を発したせいで、ウパ丸くん達はセナに気がついたみたい。

「おにいちゃん、だれ？」

と、スーくんが首を傾げた。

「えと。オイラはセナ。よろしくー！」

セナはいつものように元気に言うんだけど……。

「うわぁ、しゃべるのはやいねー、せなたん！」

ほら。チユールちゃんもびっくり。

「へっ?」

「セナ。小さい子にはゆっくり話さなきゃダメだよ?」

「そ、そなの?」

「うん。ねー、みんな?」

「うん、うーたん!」

みんなの元気な声が重なり、大人の女の人の声が聞こえた。

「まあ、いつもありがとうね、ヴァイス君」

やってきたのは、ウパ丸くんのお母さんの、又オーの“又オリー又”さん。スーくんのお母さんの、ロズレイドの“ローズ”さん。チユールちゃんのお母さんの、ルージュラの“ルージュ”さん。

「うん! 楽しいから大丈夫だよ」

とボクが言うと、

「本当に素直でいい子ね、ヴァイス君は」

「本当、本当」

ルージュさんが言うと、他の2人も続く。さすがにちよっぴり照れるなあ……。

「えへへ、ありがとう!」

ここで、お母さん達はセナに気がついた。

「あら? そっちの子のお名前は?」

とヌオリーヌさんが言うと、セナは

「あつ、オイラは、セナって言います。セ・ナ」

お母さん達に向かって、ものすごく、ゆっくり、話し始めた。もしかして……。

「ねえセナ。ゆっくり話すのは、小さい子にだけでいいんだよ」

「あつ!」

セナは飛び上がってお母さん達にぺこりとお辞儀して、

「あつ、あたらめ じゃなくて改めまして、セナですっ! ども」

と、囁んじやうくらいに早口で言った。相当恥ずかしいみたい。

「フフフ。面白いのね、セナ君」

「本当、本当」

ローズさんが言うと、他の2人が続く。セナは顔を真っ赤にして、苦笑いしていた。

「ついでにしばらく話をしていると、ルージュさんが切り出した。

「あのね、ヴァイス君、セナ君。お願いがあるの」

「なあに？」

「最近この子達がね、『冒険ごっこがしたい！』ってうるさくって……」

「そうなの？」

とボクがウパ丸くん達3人に聞くと、冒険したいしたい！と元気な返事が返ってきた。

「危ないからダメって言ってもなかなか聞かないのよね。勝手に広場から出ようとするから、もう目が離せなくて……」

「はあ」

又オリー又さんの言葉に、セナは少し気の抜けた返事をした。

「だからね、ここから近くの砂浜にある“海辺の洞窟”で遊んでほしいのよ。“宝探しゲーム”なんかが好きだと思うの」

「わーい、たからかざし〜！」

ローズさんとスーくんが言つと、

「でも……。洞窟って危くない？ 森とかの方がいいと思うけど」
遠慮がちにセナが言う。

「それがね、私達は森に住んでいるから、森じゃ満足しないの」

「あらら」

「だから、お願い。優しいヴァイス君達なら、私達も安心してお任せできるのよ」

「救助隊の依頼よりもずっと楽だと思っわ」

「この子達を満足させないと大変で大変で……」

と、3人のお母さんは両手をあわせてお願いしてきた。
ボクの答えは決まっていた。

「うん、いいよー」

こうして始まった、今日の仕事。と言っても、これは仕事としての依頼じゃないんだけどね。

まずボクらが向かったのは“ガルーラおばちゃんの倉庫”。宝物にする道具を引き出さなきゃ。あと、一応“オレンの実”も。

いつも通り笑顔のおばちゃんと、その子供のルラちゃんとお話し

していると……

「はい、2人とも頑張っているから、これ」

と、ガルーラおばちゃんはボクとセナに赤と青のバッグをくれた。

「えっ、いいの!?!」

ボクとセナの声が仲良く重なった。

「ええ。数日前から作っていたんだけど、きのうできたばかりなの。おばちゃんからのプレゼントよ」

「ありがとう、おばちゃん!」

またまた重なるボクらの声。それを聞くと、ガルーラおばちゃんは優しい笑みを浮かべて、

「どういたしまして。これからも仲良くね!」

「なかよくね!」

と言った。おばちゃん言葉を、ルラちゃんが真似する。

「うん!」

「じゃ、行ってくるぜ!」

「行ってらっしゃい! ウパ丸くとスーくとチュールちゃん、いい子にするのよ!」

「のよ!」

「うん。ばいばーい、おばちゃん、ルラちゃん！」

こうしてありがたいプレゼントにオレンといくつかの“不思議玉”を詰め込んで、ボクら“よい子の冒険隊”は“海辺の洞窟”へと向かった。不思議玉は丸くて透き通ってきれいだから、宝物にするにはちょうど良さそうだ。

「わーい、ぼうけんぼうけん」

ウパ丸くん、スーくん、チュールちゃんは、ボクとセナの周りをくるくると移動しながらついて来る。いつも以上に元気にはしゃいでいる。よっぽど冒険が楽しみだったんだね。

「……………なあ、ヴァイス」

ボクが3人を見て微笑んでいると、セナがコソツと声をかけてきた。

「なに？」

「オイラ、小さい子の相手は苦手みたいだ」

「えーっ、なんで？　かわいいじゃん！」

「いや、可愛いのはわかるけど……………その……………接し方がわからないというか……………」

「さっきみたいにゆ〜っくり話せばいいんだよ。ね？」

「嫌だよ、あんな恥ずかしい話し方できるか！」

さっきのトラウマもあるのかもしれない……。

「もう、そんなこと言わないの〜」

「いわないの〜」

ボクの言葉を3人は繰り返す。多分ボク達の会話は聞こえていないんだろうけど。でも、こんなに可愛いのかなあ。

「うう……」

セナが言葉に詰まっている。困ったなあ。ちょっと怖い顔をするよ。

「ねえねえ、せなたん」

心配しているそばから、ウパ丸くんが後ろからセナに話しかけた。

「な、何かな？」

少し引きつった笑顔で、顔を赤くしてセナは答える。うーん。6
0点。

「せなたんのしっぽ、かわいいね　くる〜んって」

「くる〜ん」

「あ、ありがとう……」

照れるとさらに笑顔が薄くなるセナ。40点。

「あーあ。チュールもこんなかわいいしっぼがほしいよ」

「スーも」

「ウパ丸も、くるくんがよかつた」

しっぼのないチュールちゃん、スーくん。さらに平たいしっぼがあるウパ丸くんも、セナの尻尾が羨ましいみたい。ボクは炎が灯つたヒトカゲの尻尾はカッコいいから気に入っているけど、セナの尻尾もかわいいかも。

「せなたん、しっぼちよーだい！」

「ちよーだい！」

とうとう3人が尻尾を掴み、弱い力で引っ張り始めた。すると、

「わあっ！」

と突然叫ぶと、セナは尻尾を上にはょいと上げて3人から取り上げた。

「あーあー。いじめちゃだめだよ、セナ。みんな本気で取るうとはしていないんだから……」

「い、いや。そうじゃなくて、その……」

どうして言葉に詰まるんだろう？ あれ、もしかして……。

ボクが試しにセナの尻尾をツンツンとつついてみると、

「あははっ!?!」

予想通りの反応。セナは尻尾を下げて、素早くボクの手から逃れた。

「あーっ、わかった! くすぐったいんでしょう?」

「うっ、うるさい!」

凶星だな。けっこう焦ってる。セナ“で”遊ぶのは面白いや。

尻尾があるポケモンは、尻尾を武器にできるけど、弱点にもなるみたい。攻撃されるとすごく痛いし、触られるとくすぐりたいし……。かく言うボクもそうだけどね。あーあ、ボクはトカゲポケモンなんだから、都合が悪いときは切り離せたらいいのに。あ、それならもっと痛そうだよ。怖いなあ。血がいつぱいでそうだよ。ああ……考えているだけで痛くなってきた。

……などと、ボクが尻尾について考えていると、誰かに尻尾をつかれた。

「きゃあ!」

「へへーん、お返し!」

セナが得意げな笑顔を見せてきた。な、なんだか悔しい……。

「やったなー! ボクだって」

と、言いかけた時だった。

「うわああ!?!」

むずむずする感じがゾツと背筋を這って、ボクとセナは重ねて悲鳴を上げた。

「あはは〜！ うーたん、せなたん、おもしろいね〜！」

と、チュールちゃん。まずい、ボクまでターゲットか！

「や、やめてよ、みんな〜！」

「えーっ、いやだー！」

「うーたんとせなたん“で”あそぶの〜！」

ウパ丸くんとスーくんが言つと、みんながボクらの尻尾をくすぐり始めた。

「ひゃっ………！」

下手に尻尾を振つてみんなを振り払つと、怪我をさせちゃうかもしれない。だからボクとセナはしばらく体をふるわせて耐えていたんだけど……

「きゃはは、もうダメ！」

「あはっ、ズルいぞヴァイス！」

ボクはとうとうウパ丸くん達3人に背中を向けて猛ダツシユ。セナも慌ててそれに続いた。

「うーたんがにげたー！」

「せなたんもにげたー！」

振り返ると、3人はトコトコと追いかけてくる。もちろん小さいみんなだから速くはないんだけど、何故だかボク達2人は恐怖に駆られていた。

「わー、まてまて〜！」

無邪気な笑い声だったけど、ボク達はさっきの感覚を思い出して、ゾツと身を震わせた。

結局すぐに、潮風の吹く砂浜にたどり着き、小さな目的地“海辺の洞窟”に着き、3人の気を紛らわせることはできたんだけど……。

小さな子相手に、全力疾走で逃げるボク達13歳（セナの年齢は出会った日に聞いていた）って……。しかも面倒をみるように頼まれたのに、本気で置いてけぼりにするなんて……。

「た、頼りないね、ボク達……」

「ああ。非常に……」

「ねー、はやくはいろうよー！」

「ぼっけんー！」

「ぼーけーんっー！」

ちびっ子達の元気があるのは何よりだけど、先が思いやられるよ……。

第2話：よい子の冒険隊

その1（後書き）

ホノオ

「情けない……（笑）。セナはともかく、ヴァイスまで情けない（笑）」

セナ

“セナはともかく” ってなんだよ（怒）！

ヴァイス

「言葉通りの意味だよ（笑）」

幼稚園児に「しゃべるのはやーい！」と言われてしまったのは、作者（達）の実体験ですw

シアン

「時と場合を考えて、適切な早さで喋ろうネ……セナ？」

セナ

「は、はい……」

ホノオ

「とことん情けないw」

セナ

「うるさいー！」

さて、2011年ですねえ。いつから更新ペースが戻るのかわかりませんが、今年もよろしくお願い致します！

セナ

「あけまして……」

ヴァイス

「おめでとごいざいます」

ホノオ

「今年も……」

シアン

「よろしくネ」

第2話：よい子の冒険隊 その2（前書き）

番外編の更新は久々ですねw

ホノオ

「さあ、セナとヴァイスのドタバタ子守はどうなるでしょう？
いなー、更新されていいいなー」

シアン

「では、どうぞ いいナー、更新されていいナー」

セナ

「……思いつきりぶん殴って、お前等の記憶を更新してやるつか（怒）？」

ヴァイス

「ホノオの番外編は書くの難しいんだって（^^;）」

第2話：よい子の冒険隊

その2

なんとか落ち着いたボク達は、持ってきた不思議玉を宝物として、宝探しゲームをすることにした。ちなみに、使う不思議玉は“敵おびえ玉”というもの。敵がいないと使えないし、ダメージを与えるアイテムじゃないから、安全だと思う。

宝物を洞窟内に隠す役目はセナが進んで引き受けた。ボクは、ウパ丸くん達と一緒に宝物を探す役目。……やっぱりセナは、小さい子は苦手みたい。

セナが不思議玉を持って、洞窟の奥に歩いていった。少し経って、セナは戻ってきた。宝物を隠し終えたみたい。

「終わった？」

ボクが聞くと、

「うん。さあ、どこでしょう？」

セナが答えた。なんだろう。すごく、得意げな顔をしている……。

「じゃあ、行こっか」

「うん、うーたん！」

ボクの言葉にウパ丸くん、スーくん、チュールちゃんの声が重なって、ボク達は宝探しの冒険（まあ、危険はないけどね）を始めた。……ちなみに、宝を隠したセナはボク達の後についてくることにな

った。ウパ丸くん達の背後も守らなきゃね。

「ぼっけん、ぼっけん」

「たのしいな」

みんなのかわいい声が洞窟に響いている。ボクも、チュールちゃんも歌い始めた歌と一緒に歌ってみた。

「あつ、みんな。岩があるよ？ このかげにあるのかな？」

「わーい、さがしてみよう！」

ボクは時々こうやってアドバイスをし、みんなと楽しくお話しした。

この岩の陰にあるのかな？ 違ったね。

じゃあ、こっちの岩かな？ あれ？ まだ見つからないね。

おかしいな。いつまでたっても宝物が見つからないや。この洞窟はあんまり広くないし、地面にある岩の隙間くらいしか隠し場所はないはずなのに。

「ないよー」

「どっコー？」

「せなたん、どっコー？」

みんな頬を膨らませてセナを見上げている。相変わらず得意げな顔のセナ。本当に、どこに隠したのさ？

もうすぐ洞窟の奥にたどり着いてしまう。そんなとき、ボクは見つけた。大きめの岩のかげに、小さな小さな砂山があるのを。……

こんな隠し方しなくても、と呆れつつ、

「あれー？ みんな、これは何かな？」

と、砂山を指差してボクが言うと、ウパ丸くとスーくとチュールちゃんは砂山に向かってよちよち走り出した。チュールちゃんが両手で砂山を崩す。たぶん、あの中には……。

「わあ、あつたー！」

「たからものー！」

砂の間から、桃色の、手のひらサイズの球が出てきた。やっぱりね。こんなところに隠してあつた。

みんなは宝物を見つけて喜んでるんだけど……。

「ありや、見つかった」

「ねえセナ」

「あ？」

「もっと簡単な場所に隠してあげてよ……」

砂で不思議玉を隠しちゃうのは、ちょっとずるいかな。やっぱりセナは、小さい子に対する接し方がよくわからないみたい。「むずかしーい！」と、みんなの不機嫌そうな声が聞こえた。

仕切り直して、もう一度宝探しを始めることに。今度のセナは、

もつと簡単な場所に隠してくれる……はず。

「もういいぞー。隠してきた」

今度はやや退屈そうな顔をして、セナが戻ってきた。

「よし、みんな！ 探しに行こう」

「うん、うーたん！」

3人の声がそろって、ボクらはまた宝探しを始めた……が。

「ねえ、みんな。そんなところにはないんじゃないかな？」

ボクは、そこら辺にある小石や、時には協力して（小さな子にとっては）重い岩を持ち上げて不思議玉を探し始めたみんなに言った。

「だってー。せなたんいじわるなんだもん！」

チュールちゃんが、少し怒った顔で不満を漏らした。……なるほどね。今日、純粋な子供達は、疑うことを覚えた。

いいんだか悪いんだか。

セナは口をへの字に曲げて、「へん。岩の下なんかありませんよーだ」とでも言いたげに、仏頂面で近くの岩を持ち上げた。すると、

「んっ!？」

と、セナ。何か見つけたのかな？ それともただの演技？

マズい、ボクまで疑いの心を持ちそう。とりあえず、ボクはウパ丸

くん達に声をかけて、セナの近くに行ってみた。
待っていたのは、まさかの展開。

「ほら、見ても」

セナが指さしたのは、水色の石がきれいに輝くペンダント。岩の下には、本物の宝物が隠されていた！

「わあー！」

「きゃー！」

「きれーい！」

これにはみんなも大はしゃぎ。まずは女の子のチュールちゃんがペンダントを身につけてみた。とてもよく似合っているよ。ウパ丸くんも、スーくんも、自分にも貸してとお願いしている。ボクも嬉しいけど、みんな、とても嬉しそう！

だけど、もっと疑うべきだった。どうしてこんなところに宝物があるのかを。

穏やかなムードは、すぐに壊されちゃった。

「おい」

セナの声……じゃない。もっと低い、大人の声がボク達を呼んだ。

「はい？」

返事をしてそっちを向くと、笑顔が凍りついた。すごく怖そうな顔をした、3人のキングラー（大きなはさみを持った、赤い、カニのようなポケモン）がこっちを見てる。しかも、一番大きい（たぶ

ん、ボスだね！キングラーさんは、サングラスなんかかけちゃって……。怖い。すごく怖い！

「お前ら、俺が大切に隠しといた宝を盗もつて？ あ！？」

うそ！？ このペンダント、誰かのものだったのか！ 冷静に考えてみたら、確かにそうかも。だって、岩の下に、大事そうに……。頭の中が真っ白になったボクは、ただ、言葉を発したサングラスのキングラーを見るだけ。

そんなときは、やっぱりセナは頼りになるや。チュールちゃんからそつとペンダントを受け取って、ボクらをかばうように前に立ち、「ごめんなさい！ オイラ達、これがあなた達の物だって知らなくて……。お返しします！」

頭を下げて、ペンダントをサングラスに渡した。さすが！ と、ボクが安心していると、なんと。

「謝れば済むと思うなー！」

サングラスが怒鳴り、そのた2人のキングラーがセナにハサミを振り下ろした！ 怒鳴り声が聞こえた時点で察していたのか、セナは攻撃を上手くかわした。でも、かなりビックリした顔をしてる。

「そいつはなあ、死んだ俺の彼女が、昔に俺にくれたものなんだよ。いくらガキだからって、それを自分達の物のように扱ったテメーらは許さねえからな！」

ヤバい、そんなに大切なものなのか！ どうしよう……。みんな怖がってるし、スーくんなんかもう涙目だよ。ボクが不安になってい

ると、

「ごめんなさい。悪いのはオイラなんだ。だから、他のみんなには手を出さないでください！」

またセナが頭を下げた。カッコいいなあ。こんな勇気がボクにもあればなあ……。

「ほう。なかなかいい根性してんな。気に入った。その望みだけは聞いてやるが……覚悟しろよ、ゼニガメ！」

サングラスが言い終わると、セナは振り返ってボクらを見た。そして「逃げる！」と叫ぶ。

セナだけ危険な目にあうなんて……。でも、ウパ丸くん達に怪我なんかさせられない！でも、セナは大丈夫なのかな……。？　なかなか決断できないボクを、セナはとうとう怒鳴りつけた。

「行け！！」

ボクより先に、ウパ丸くん、スーくん、チュールちゃんが動き出した。みんな怖がって、急いでその場から逃げていく。

心残りのあるまま、ボクも急いで駆け出した。

ごめんね、セナ！

逃げる途中に、セナが押し殺した悲鳴のほんの小さなかけらが聞こえたのが辛かった。ボクらに心配かけないように、攻撃されたのを隠そうとして……。それも上手に隠さないでよ、セナ！

セナやキングラー達からだいぶ離れたとき、少し大きな岩を見つ

けた。とりあえず、そのかげに隠れて様子を見てみた。セナは攻撃をなるべくかわそうとしているけど、3対1じゃ、やっぱり不利だよ。痛そうな一撃が、次々と加えられていった。

「セナ……」

助けたい！ でも、怖かった。それに、ウパ丸くん達の近くから離れちゃいけない、という言い訳もボクのジヤマをした。途方に暮れていると、

「うーたん！ セなたんがかくしたたからものがあつたよ！」

と、ウパ丸くんが、“敵おびえ玉”を持ってきた。

「うーたん。せなたんをいじめるわるものをやっつけよう！」

と、チュールちゃんが言うと、「やっつけよう、やっつけよう！」と、ウパ丸くとスーくんが声をそろえた。

みんな……ボクよりもよっぽど勇敢なんだね。それとも、ボクがだんだん弱虫になったのかな？ 気がつきたら、視界が潤うるんでぼやけてきた。

「みんな……ありがとう。あのキングラーさん達はね、悪者じゃないんだ。でも、せなたんを助けなきゃね！」

ボクはおバカだ。ウパ丸くん達を岩陰に待機させるべきだったのに、ついすっかり、みんなと一緒に突撃しようとしてしまった。

でも、岩陰から出ると状況が変わっていた。キングラー3人の攻撃が、パタリとやんでいたんだ。不思議に思っおもって近づいてみると、あれ？ キングラーの数が増えているような。とりあえず、会話の

内容に耳を澄ましてみた。

「だから、そのペンダントは私のものよ！」

初めて聞く、女のポケモンの声。これが、増えたキングラーの声だと思う。

「何言ってるんだ、ねえちゃん。俺のだって言ってるんだろ！」

「調子に乗っていると、そのゼニガメみたいになるぞ！」

こっちが、怖いキングラー達。

「セナ！！」

「せなたん！！」

そして、これは戻ってきたボくら。倒れてるセナの体には、ハサミでつけられた傷がいっぱい。すごく痛そうなんだけど、

「戻ってきたのかよ、お前ら……」

と、苦笑いを浮かべてセナは言った。さらに、

「オイラは全然平気だよ！」

と、元気に立ち上がった。呼吸が、かなり乱れているんだけど……。

「ちっ、うるさくなつたな……。まあいい。さあねえちゃん。ペンダントは諦めてもらおうか!？」

「嫌よ！ 私の大切な物なの！」

どうやら、サングラスのキングラーの怒りは、女のキングラーさんに向けられたらしい。しかし、どっちがペンダントの持ち主なんだろう？ ボクが、ウパ丸くん達の様子を見ながら考えていると、セナが何気なく岩を持ち上げた。

「……ん？ ねえ。こっちの岩の下にはブレスレットが隠してあったんだけど。これは、どっちの？」

セナの質問に、先に答えたのはサングラス。

「そいつも俺のだ。間違いない」

「そうか。お姉さんのじゃないの？」

「うん。違うわ」

お姉さんキングラーは、控えめに否定した。

「……お姉さんの正解。だって、」

と、セナ。心なしか、また得意げに笑っている。

「ブレスレットなんて、無いから」

セナが岩をよせると、確かに、なにもない。ということとは、サングラスは嘘つき！？

「ふふふー。ボロが出ましたねえ。どうせペンダントも、お兄さんのじゃないんですよ！」

セナが言うと、サングラスのキングラーとその他2人はドキリとした表情をした。それにしてもセナ、すごい推理！

「ハハハ。バレたんじゃ仕方がない。テメーらを倒して、ペンダントを奪ってやる！」

酷い！ お姉さんのペンダントを取っちゃうなんて！ 戦うなら、ボクも負けないぞ！ と、やる気になっていたときだった。

「そうはさせないぞー！」

「わるもの、かくごー！」

全身が凍り付いたかと思った。だって、ウパ丸くん達3人が、キングラー3人に突撃するんだもの！

「えーい！ “みずでっぼう”！」

「かくごー！ “すいとる”！」

「いくよー！ “こなゆき”！」

ウパ丸くん、スーくん、チュールちゃんが、それぞれ攻撃を繰り出した。

「わっ、やめろー！」

あんまりダメージはないみたいだけど、キングラー達は反撃できない。ボクやセナの年代ならともかく、ウパ丸くん達みたいになちびつ子には乱暴できないみたいだね。

よーし、チャンスだ！ ボクは“敵おびえ玉”をしっかりと持って、振りかぶった。そして、腕を素早く振り下ろして、キングラー達め

がけて投げつけた。

ピンク色の光の粉がキングラー達にかかった直後のことだった。

「ぎゃあああ！　ちびっ子怖いよー！！」

「ぎゃあああ！　うがあああ！！」

キングラー達は突然、こっちがビックリするくらいに怯えはじめて、横歩きで猛スピードで逃げていった。

「一件落着」

と、セナは呟き、お姉さんキングラーにペンダントを返した。

その後お姉さんキングラーは、ボくらみんなに小さな真珠をくれた。お礼だつて言われて嬉しかったけど、ボクは一番役に立たなかった気がする。

そして、キングラーさんとも別れ、洞窟を抜けて、ボク達は“はるかぜ広場”へと向かった。夕陽がきれい。そろそろ、お母さんが心配している時間かな？

「いたいのいたいの、とんでいけー！！」

スーくんは歩きながら、さつき怪我をしたセナに向かっておまじないを唱え始めた。セナは“オレンの実”を食べて怪我を治したんだけど、ウパ丸くとチュールちゃんまでおまじないを始めた。

「アハハ、もう大丈夫だよ。ありがとう」

セナの今の反応は、90点くらいかな。小さなみんなに目線を合わせていないのが、惜しいなあ。

「みんな、本物の宝物を見つけてられて、よかったね！」

もらった真珠を見せながらボクが言うと、「うん！」と声が重なった。

「わるものもやっつけたよ！」

と、得意気なウパ丸くん。確かにそれもいいことなんだけど……。みんなをちよつと危険な目にあわせた罪悪感を、ボクとセナは感じた。

広場に着き、大満足のウパ丸くん、スーくん、チュールちゃんをお母さんのところに連れて行った。やっぱり、感謝されると嬉しいね！

そして、夜になった。“サメハダ岩”の草のふとんに座りながら、ボクはセナに話しかけた。

「今日のセナ、かつこよかったなあ。ボクやウパ丸くん達を守ってくれるし、名推理を披露するし」

「よし、よしよー！」

セナは照れて、強く否定した。

「……逆に、ボクは情けなかった」

「……へ？」

「逃げちゃってごめんね。助けるの遅くなってごめんね。小さい子よりも弱虫で、ごめんね……」

言ってる途中で泣きそうになって、言い終わったら泣いてた。あーあ。もっと強くなりたいなあ。

「……あの子」

セナが話し出す。

「子供の相手が苦手でごめんね。宝物を難しいところに隠してごめんね。それから、えーと、そもそも、いきなりガイアに来て、迷惑かけちゃってます。ごめんね。……これでおあいこ？」

「……えっ？」

「お前にもオイラにも、短所があるってこと。だからおあいこ、だろ？」

確かにそうかもしれない。でも、なんだか納得できなかった。

「でも……。ボク、今日みたいにセナだけが傷つくのはいやだよ。

キミに負担をかけるのはいやだ。そう思ってるのに、勇気が出ないんだ」

「そうか。分かった！」

少し間を空けて、セナが言い出した。

「じゃ、明日からしばらくは、勇気がなきゃできない仕事をしようじゃないの!」

勇気がなきゃできない仕事?

「なに、その仕事って?」

「お・た・ず・ね・も・の　逮捕さ、逮捕!　スリルあるだろ?」

「えっ……」

「一度やってみたかったんだよねー　絶対やりがいあるよ」

えーっ!　怖くて悪いポケモンと、進んで戦うの!?

「まあ、草タイプの泥棒や虫タイプの盗賊みたいに、お前の得意なタイプのやつを狙ってやるからさ。安心しろよ」

怖い。けど、セナはボクのことを考えて……。

「う、うん。分かった。ボクがんばる。うん……」

プルプル震えながら、ボクは情けない返事を返すのだった。

明日からどうなっちゃうのかなあ、ボク。セナに迷惑かけなきゃいいけど。少しは勇気が出たらいいんだけど……。

第2話：よい子の冒険隊　その2（後書き）

さて、次回からはお尋ね者逮捕の仕事だね。ヴァイス君。

ヴァイス

「怖いよ怖いよー！」

セナ

「頑張れヴァイス。書いてた小説のデータが消えたときの作者ほど恐ろしいものはないんだからサ」

うん、言い返せない（汗）。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5359/>

オイラとボクの救助隊日誌

2011年10月9日19時46分発行